

武庫川女子大学教育研究所／ 子ども発達科学研究センター 2012年度活動報告

Progress Reports on
Mukogawa Women's University Center for the Study of Child Development 2012

河合 優年* 難波 久美子** 佐々木 恵**
石川 道子* 玉井 日出夫***

KAWAI, Masatoshi, NAMBA, Kumiko, SASAKI, Megumi,
ISHIKAWA, Michiko & TAMAI, Hideo

目次

- I. はじめに
- II. 2012年度の子ども発達科学研究センターについて
- III. 2012年度活動概要
 - 1. すくすくコホート三重・武庫川チャイルドスタディ
 - 2. 西宮市研究協力・受託事業
 - 3. 子どもの育ちと学びを支える専門職の方のための「子どもの発達」を学ぶ会
- IV. 研究業績 (2012年度)

*武庫川女子大学教育研究所 (子ども発達科学研究センター)・研究員、文学部心理・社会福祉学科・教授、**武庫川女子大学教育研究所 (子ども発達科学研究センター)・助手、***武庫川女子大学教育研究所 (子ども発達科学研究センター)・研究員、客員教授

I. はじめに

2012年10月、武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター（以下、子どもセンター）は、研究母体となった科学技術振興機構（JST）の「日本における子供の認知・行動発達に影響を与える要因の解明」に関する研究についての追跡調査・評価を受けた。データの管理、ミッション終了後の業績等、大規模研究に期待される基準が継続して満たされているかを確認するものであった。また、研究途上において開発された様々な指標や方法などがどのように活用されているのかという、いわゆる社会実装と呼ばれる実践的活動への波及効果についても聴き取りを受けた。

これまで研究レポートにおいて報告してきたように、子どもセンターでは、三重県（津市・尾鷲市）と兵庫県（西宮市）を中心とした追跡研究を展開するとともに、JST時代の大阪、鳥取のデータを加えた解析と論文化をすすめてきている。これらについては順次論文化がなされており、研究体制の維持を含めて一定の評価を得られたものと考えている。これらの評価結果については、25年中に公開されることになっている。

子どもセンターの事業に関しては、設立から4年目を迎え、論文化を進めるとともに、次のステップに向けた研究の展開を計画する段階に来ている。

2013年度は設置5年目で当初の計画では、センターが閉鎖されることになっている。これまでのデータが死蔵されることなく研究に活用されるよう、また国内外の研究者への資料提供と共同研究への新たな研究費の獲得を目指す予定である。

II. 2012年度の子ども発達科学研究センターについて

1. 本年度の取り組みについて

2012年度の取り組みとして新たに加わったものとして、西宮市内の研究協力をお願いしている小学校と中学校の児童生徒を対象とした、仲間関係の形成過程についての研究がある。これは、学級内での人間関係と学習意欲等を測定する指標（QU）を用いてのものである。この指標は、コホート研究においても入学時の調査の中に組み込まれており、コホート研究の協力者の子ども達の特性を把握する上でも意味のあるものとなっている。対象は、小学生約600名、中学生約300名となっており、比較的大規模なデータとなっている。コホート研究で培われた追跡分析の手法を用いながら、仲間関係の形成や動機付けについて検討を加える計画となっている。この研究は、研究所の特別研究経費によって進められている。12月には、2013年度の研究に向けて、ゴンザガ大学の教育学部を訪問し、サンダーランド学部長と研究打合せを行った。スポケーン市における小学校と中学校のデータも収集できる見通しが立ってきている。

これまでの継続研究については、概ね計画通りに進んでいる。子ども達の従来の研究を継続しながら、研究の充実と社会還元をセンターのテーマとして取り組んできている。子どもセンターの活動は、① JST 研究の継続研究として進められている「乳幼児期の個体・環境要因が児童期の社会的行動に及ぼす影響についてのコホート研究」（科学研究費補助金基盤研究（A））、②西宮市からの「10か月児アンケート健康診査及びフォロー事業に関する委託」に関わる業務と研究、③ JST データの移譲を受けてから開始された、JCS 研究データの共同利用に係る管理と貸与等の運営、④研究成果の学内学生への教育的提示、⑤地域連携の5つに分けられる。

①のコホート研究は、計画に従って、西宮市（武庫川チャイルドスタディ）では6歳児の観察と質問票による調査が、三重県（すくすくコホート三重）では小学校2年生のWISC知能検査と学校適応調査、NICUコホートの6歳児の観察と質問票による調査が進んでいる。

②の西宮市の「10か月児アンケート健康診査」については、10か月児の個別健康診査開始のため、アンケート健康診査の実施は最終年度となった。データ確認とすくすく相談会対象者の抽出作業を行っている。また、これまでのデータ整理をおこない、その一部はデータブックとしてまとめられ、個別健康診査の資料として配布される予定である。また同時に、子どもセンターとしての報告書の準備を進めている。

③のデータ管理については、匿名化データの貸し出し依頼等を受けつけている。当面の間は、旧 JST コホート研究のメンバーを中心としたデータ貸与に限定されている。今後のデータ共有のために、2013年2月より画像データベース化の作業に入る。研究全体の経過と武庫川グループの成果報告等は、2012年3月31日に JST 東京本部別館ホールにおいてなされた。これに関しては、報告書として公刊される。2013年が計画の最終年度となるため、データが四散しないように研究グループでの検討に入る予定である。

④子どもセンターの設置目的である、研究成果の学内学生への教育的提示については、学部生の研究会活動などへの説明を通じて、研究への動機付けを行っている。

⑤研究成果の地域への還元として、これまで同様に専門職者に対し、毎月1回の勉強会を開催してきた。この活動も定着してきており、保育士等の参加が増えてきている。

2. 外部資金の獲得について

子どもセンターは教育研究所の研究組織として設置されているが、外的評価の指標として外部資金の獲得を期待されている。2012年度の研究費としては、科学研究費補助金（基盤研究（A）：課題番号21243039）、西宮市からの委託料、私立大学経常費補助金特別補助の他、メディカ出版、どりむ社などからの研究助成費を受けて研究が進められた。

2013度についても同様の資金確保を目指している。

3. 次年度に向けて

子ども発達科学研究センターの4年目の活動計画は概ね昨年通りである。

①の追跡研究においては、すくすくコホート三重の協力者のうち、人数的に最も多い、第2グループが小学校2年生になり、昨年第1グループに引き続いてWISC知能検査を受けることになる。武庫川チャイルドスタディ（西宮市）、すくすくコホート三重のNICUコホートも学齢に達する者がでてくるようになり、研究開始当初に想定されていた、メインアウトカムとしての学童期の社会性と初期発達の関係を解明するという目的に近づくことになる。2013年度は、計画研究の最終年度になるため、定期的に開催されている、研究グループ全員による全体会において、今後の継続計画について検討する。協力者との関係も良好であることから、本研究を継続させるとともに、これまでのノウハウを使って、センターの国内外の認知度を高める予定である。

②の西宮市の10か月児アンケート健康診査は2012年度末で終了する。その結果についてはまだ専門誌に発表されていない。これまでのデータを解析し、疫学研究誌等に投稿を計画している。また、データそのものについては、発達モデルの構築等に活用していく。

③のデータについては、質問紙データ、医師観察データ、画像データのデータセットを完了する。また、それをテンプレートとして、今後の追跡研究におけるアーカイブ化についての検討に入る。特にインターネットを介した画像データの管理については、別に研究として立ち上げる必要があるかもしれない。

④の教育活動との接続については、大学院修士課程の学生の研究において、子どもセンターで用いられてきた検査項目や要因分析の枠組みを用いたものが多く出現してきている。2013年度の具体的な学生の活動としては、レジリエンス尺度の活用、QU尺度の活用などが計画されている。また、①の成果などを反映させた形で、ミネルヴァ書房より保育心理学が出版される。本学の幼児教育を目指す学生への還元がなされることになる。

⑤に関しては、2012年度同様に、石川、河合が西宮市のわかば園、砂子療育園、教育委員会などとの連携を保ちながら、さまざまな形でのアドバイス活動に参画してゆく。この活動の成果として、これら機関からの臨床教育学研究科への受験生が増加してきている。

2012年度同様に進めるとともに、勉強会の総括を行い、何らかの成果物を出版できるように、すでに調整に入っている。

上記以外の研究計画として、アメリカ・スポケーン市のゴンザガ大学との、子どもの生活実態調査がスタートしている。2013年度8月には、ゴンザガ大学において日米の幼児教育と初等中等教育課程をターゲットとしてシンポジウムが開催される予定になっている。また、小学校の低学年を対象とした、日米の比較研究についての研究費を米国において獲得する計画がスタートし、6月の面接に共同で臨むことになると考えている。

Ⅲ. 2012年度活動概要

1. すくすくコホート三重・武庫川チャイルドスタディ

(1) 2012年度の進捗

すくすくコホート三重では、協力者の全員が小学校に入学した。学校適応状況については、米国との共同研究の箇所において述べられる QU テストが実施されている。本研究の対象者のデータが、国際的なデータと比較されることになる。NICU コホート調査については、6歳児調査・観察がなされ、入学前のデータ収集がなされている。2012年度の分析は主として熟慮衝動傾向と他の行動特性との関係についてなされた。これらの結果は、学会発表されている。

母子の生理的ストレス解明チームは、胎児期および出産直後の母親の心理特性についてのデータ収集が完了し、すでに臍帯血情報との関係についての解析に入っている。胎児感情等の生理的な基盤解明が期待される。

武庫川チャイルドスタディでは、6歳児の調査・観察が開始されている。縦断研究の研究方法については、日本心理学会において話題提供を行った。追跡研究において、同じ機能を異なる指標で測定することについての問題点が、本研究においても見え始めているが、これらについての有意義な議論がなされた。

すくすくコホート三重と武庫川チャイルドスタディの協力者向けのニューズレターは、順調に発刊できた。学齢期の子どもを持つ保護者の方々に多くの情報を提供できたのではないかと考えている。

2013年3月に全体会議が計画されている。

(2) 今後の展望

2013年度には、多くの協力者が小学校に入学することになる。家庭から集団の一斉授業の中に入っていきることになり、社会性のスキルが試されることになる。このスキルとストレスについての測定が、小学校中学年におけるターゲットとなる。2013年はこの点についての検討に入ることになる。

2. 西宮市研究協力・受託事業

(1) 2012年の進捗

西宮市地域保健グループとの研究協力は、最終年度となり、基礎データのまとめを進めている。同時に、2008年度に開始した「乳児後期アンケート」の結果を含めた、外的指標としての発達的变化の結果をまとめ始めている。「10か月児アンケート健康診査」は、今後小児科医による個別診断に移行していくことになり、これまでのデータ集計の一部は資料として提供される。

(2) 今後の展望

2013年度はこれまでの結果をまとめ、コホート研究の基準値としてのデータを提供する。

3. 子どもの育ちと学びを支える専門職の方のための「子どもの発達」を学ぶ会

(1) 2012年度の取り組み

2011年度では、いつまでに、どのようなことができていないといけないのか、そして、ある時期までにできていないと、その後どのような点で困るのか、ということに注目した。参加者からの具体的なケースに基づいて、どの部分に引っかかって「気になった」のかを検討しながら、「at risk」に注目しがちな臨床場面で、「developmental hazard」を視野に入れた子どもの把握が重要であることを学習した。

このような検討を進める中で、しばしば指摘されたのが、実際の保育の現場では、生活面の自立が遅れており、本来なら集団での問題について論じることになる年齢に、まだその状態まで達していない子どもが増えているという状況である。

そこで、2012年度の前半は、保育の現場でどのように、何を、いつ教えているのか、子どもたちが好む遊び、といったことを出していただき、子どもたちの現状を把握したい。

これを踏まえて、後半は単に経験がなくてできない子どもと、手をかけないと学習がうまくいかない子どもを、どのように、いつ区別することができるのか考えたい。そして、それぞれの子どもの状態に合わせて、集団でどのような援助ができるのか、あるいは、家庭でできる訓練（遊び）を提案できないか模索したい。

(2) 実施記録

学ぶ会は、武庫川女子大学学術交流館1階会議室を利用して、おおむね月1回、土曜日に開催された。講演・検討時間は、10:00～11:30である。開催日時と実施内容を表に示した。

表 子どもの育ちと学びを支える専門職の方のための「子どもの発達」を学ぶ会
2012 開催報告

回	日程	テーマ	タイトル	担当者	参加者数	院生参加
1	5月12日	概論	認知発達の捉え方	河合優年	25名	1名
2	6月9日	発達障害概論	発達障害の捉え方	石川道子	30名	0名
3	7月7日	事例収集1	食事場面の困りごと	石川道子、難波久美子	27名	1名
4	8月4日	食事場面1	偏食	石川道子	18名	0名
5	9月1日	食事場面2	自分で食べない	石川道子	21名	1名
6	10月6日	事例収集2	食事場面以外での困りごと	石川道子	18名	1名
7	12月1日	生活習慣場面1	排泄場面	石川道子	23名	1名
8	2月2日	生活習慣場面2	着替え・入浴場面	石川道子	13名	0名
9	3月9日	まとめと展望				

(3) 各回の講演内容抄録

1) 第1回

今年は日常の生活習慣場面において気になる行動や困ったことを取り上げていく。その中で、子どもの発達を捉える視点として、個々の機能の単線的な発達現象ではなく、それらが有機的に関係しあった複合的なものであることや、それぞれの機能の形成過程を理解することによって、問題解決に近づくことなどについて説明がなされた。

まず、養育者と子どもとの関係、保育士と子どもとの関係、というように様々な人と人との関わりの中で生活している。それでは、この「関係性」をどのように捉えればよいだろうか。ActionとReactionは見える（＝行動）が、その間にある関係性は見えない。しかし、その関係性を適切に捉えることで、日々のコミュニケーションは成り立っているということ意識化しておくことが必要である。

次に、発達曲線について考えてみる。通常、右肩上がりの直線を描くことが多いが、実際にはすべての発達課題を完璧に期待された順に通過していく子どもはいない。凸凹があるのが当たり前であり、それを許容しなければいけない。

また、発達を考える際には、要素がさらにその次の段階の行動を獲得するために必要な要素になっているという点に注意が必要である。これは、本来踏むべき段階を踏まずに独自のやり方で先に進む子どもの発達を捉えるのに役立つ視点である。本来踏むべき段階を踏まない場合、その行動を形成している要素の獲得が飛ばされてしまうことがある。この要素が、さらにその次の段階の行動を獲得するために必要な要素になっている場合があり、その次の行動の獲得が難しくなる。結果として、場当たりに独自の方法で進まざるを得なくなる。

生得的要因は、発達を捉えるうえで、どのように考えればよいだろうか。生得的＝

勝手にできるようになること、と思いがちだが、勝手にできているように見えているものの中には、もともと規定されているものと、環境がその発現の引き金をひくものがある。普通はありえないような厳しい条件を設定して実験すると、発達に障害が起こる。生得的に備わっている道具（限定されていたとしても）を用いて、自分自身が能動的に環境（自身の身体も含む）に働きかけ、それに対して適切な応答があることが重要である。

発達を捉えるうえで、どのように次の段階に移行していくのか、という点は重要である。一まとまりの特徴を持つ段階（フェーズ）から次の段階へと移行しながら発達していく。このとき、急激に変化するのではなく、前の段階で優勢な行動と、次に獲得される行動が同時に存在する移行期（ブリッジ）があり、ゆるやかに調整しながら進んでいく。この移行期では、間もなく次の段階に移りそうに見える状態でも、確実に前進している途上と、まだ次の段階への準備ができておらず、不安定な状態が同じように見えてしまうことがある。

発達するというのは素晴らしいできごとである。しかし見方を変えてみると、社会に適応的に発達するということは、ストレスである。環境からの要請で、適応するために行動を変化させていかなければならない。変化にはエネルギーが必要である。“オムツ”の進化のように、近年は、子どもの快適さが追及されている。親もその状態が快適であると、変化が要請されない。環境からの要請が変わってきている。変化する必要がない、変化が先送りにされてもよい、ということができてきている。

2) 第2回

第1回の概論で関係性、発達曲線、生得的要因、フェーズとブリッジ、発達ストレスなどを中心に、発達をどのように捉えていけばよいのか考えた。それでは、このような発達の捉え方をしたときに、発達障害をどのように理解していけばよいのだろうか。5つのキーワードから考えたい。

- ①関係性 発達障害系の子どもは、この見えない関係性を読み取ったり調整したりするのが難しい場合が多い。
- ②発達曲線 ある時期にできていない行動だけを教えても、なかなか習得できないことがある。もしかすると、その前（や、さらに前）の段階に原因があるかもしれない。
- ③生得的要因 そもそも発想が違うタイプ、ということがあるかもしれない。環境を調整することで、現在発現していない部分（能力？）を引き出すことができるかもしれない。障害された能力に関しては、環境調整をすることで後から取り返せるものもあるが、その時期を逃すと修正が難しいものもある（ようすを見ましようの功罪）。

④フェーズとブリッジ 本来のフェーズから考えると、遅れているのだが、間もなく歩きそうだから良いでしょう、とは限らない。なぜ遅れているのか、どのように移行期を過ごしているのかをよく観察しなければいけない。その年齢にある子どもが大方変わっていくときに、変わらないため、目立つことがある。

⑤発達ストレス 環境からの要請が変わってきている。変化する必要がない、変化が先送りにされてもよい、ということがでてきている。発見が遅れる。

これらの特徴を踏まえて、支援を考えていきたい。まず、保育の場面をいくつか設定し、どのような困りごとがあるのか挙げていき、整理したい。また、それらの困りごとに対して、対応の方法を集め、議論したい。

取り上げる場面は、特に身辺自立に注目する。身辺自立は、「やってもらう」から「自分でやる」というようになっていく。その間に「やらされる」という時期がある。また、環境が変わる、あるいはフェーズが変わる時期がある。たとえば、「家庭」から「集団参加」という変化である。その後、小学校への入学、本人の情報の取り方が変わる4年生頃、中学2年生、高校入学、就職活動、就労、といったような時期に変化が起こる。今回は、まず2～3歳頃に注目したい。

身辺自立で特に問題になりやすいのは、「食事」、「着替え」、「排泄」といった場面である。これらを順に取り上げる。また、整理をする際、「単体でもできない」、「集団でできない」というところに着目したい。これは、同じできないという事態であっても、原因や支援の仕方が異なってくると考えられるからである。

まず、食事場面の困りごとについて考える。各自で、主に集団での食事場面で困ったことをメモしてもらおう。相談として受けたことでも可とする。これらを集め、分類した。大きく9カテゴリに分類が可能であった。

- ・ 偏食
- ・ 他人との区別
- ・ 量
- ・ 食べ方独特
- ・ 食べ方ヘタ
- ・ 食事時間
- ・ 姿勢 (+ 椅子に正座)
- ・ 座ってられない、立ち歩き
- ・ 気が散る

次回、これらの解決策を考えていきたい。

3) 第3回

前回の食事場面での困りごとを再検討し、10カテゴリに整理した(資料1)。参加



3 回 (2012/07/07) で挙げられた記述をもとに再編集。同じ見についての記述と並べられるものに縦線の内容が入っている場合は、分割して分類、重なり部分をグレーで表示。線は、カテゴリ内キーワード。

1. 偏食

- ・好き嫌い (決まったものしか食べない)
- ・極端な偏食 (細かく切って混ぜ込んでも、選り分けて出してしまふ)
- ・偏食が多い (おかずは唾しか食べない、ご飯しか食べない、色で分かるか他の色の物は口に入れさせない、隠して口に入れても、味・舌触りの違いを感じるのか口から出す)
- ・偏食 (食材、見た目、温度、切り方等形状などによって極端な好き嫌い)
- ・偏食が多い (野菜が苦手で手がとまる、姿勢が崩れてくる)
- ・好き嫌いが多い
- ・炭水化物しか食べない
- ・偏食がひどい (白いご飯しか食べない)
- ・偏食がきつい (お茶、牛乳も飲まず、夏場は熱中症になるか心配になる。白ごはん、うどん等とおかずも家で見た物しか食べないことが約半年続いた。)
- ・汁物、牛乳、お茶等の水分が苦手
- ・偏食がひどい (母乳以外受け付けようとしなない)
- ・偏食をどこまで食べさせたらよいか

8. 他人との区別

- ・自分の食事と他者の食事の区別がつかず、他児の分まで手を出してしまう
- ・他の子どもの食べ物欲しが、食べたがる

2. 自分で食べない

- ・自分で食べようとしなない。スプーンが口元へ来るのを待っている (たまに介助者の手を持つ。一緒にスプーンを持つこともある)
- ・自分で食べようとせず、食べさせてもらうのを待っている
- ・食べさせてもらうことを待っている
- ・親が食べさせないと食事を食べない
- ・食事は母でないと嫌がる (母以外の人と食事できない)
- ・母と離れるのが難しく、食事は母でないと嫌がる。
- ・必ず職員が付く。いなくなったり、スプーンをふり回したりする。

3. 少食

- ・少食なので、食事時間が1時間以上かかる
- ・食べる量が少ない (おなかが空かない? 食事に興味がない?)
- ・ダラダラと食べ続ける
- ・朝食・昼食のどちらからかを食べない

9. 姿勢

- ・食事が始まってすぐに姿勢が悪くなり、後ろを向いたり、椅子から降りたりして落ち着いて食べるこどができない。
- ・給食時、椅子に座れない、足を閉じて座れない。一姿勢が崩れて遊びだす。
- ・野菜が苦手の手がとまる、姿勢が崩れてくる

4. 食べ方がへた

- ・かむことができず、いつまでも口の中に食べ物がある
- ・前歯でかむのか、歯ぎしりのような音が出る
- ・食べ物をうまく飲み込めない、のどに詰めてしまう
- ・スプーン等道具が使えない
- ・食べ方が汚い
- ・食べばしょも多い

5. 飲み込む

- ・満腹感がにぶい子 (あまりかまず、飲み込むように食べる。食べるペースがはやい、いくらでも飲しが、など)
- ・食べるのが早い。飲み込んでいる?

10. 食べ方が独特

- ・おかず→ご飯→お汁など、1つずつ食べ、好きないと手を止める。
- ・デザート (甘い物、果物) と水 (お茶) を飲み過ぎて完食できなくなる (おかずを前に食べるように促しても話を聞かない)
- ・食べるが遅い、時間内に食べられない (大人が食べさせようとすると、“自分でやる”と主張する、手伝わうとすると怒る)

6. 座っていられない・立ち歩き

- ・座れない (落ち着いて食べられない)
- ・座って食べない
- ・座って食べられない
- ・座って食べられない (時間が長くかかる)
- ・イスに座れず、ウロウロしながら食べる
- ・食事中ウロウロ歩き回る
- ・双子。家庭では、母親との食事はウロウロ歩き回り、言い聞かせられない状態。少しずつ改善。母と離れるのが難しく、食事は母でないと嫌がる。
- ・自分で食べられるものは食べるが、自分で食べられないものがあるとすぐ立ってしまう。
- ・食事の時、少し食べたら立ち歩く。集中して食事できない。
- ・食事にあきると、席を立ったり寝転んだりする。

7. 気が散る

- ・食べることに集中できず、机の上にあるもの (コップ、フキン、窓の外、イスの二等) が気になってしまう。
- ・集中できない (1口2口など緩口で、少し食べて場所を離れる。興味に移ってしまう。度を超している時は、いつまでもたっても食事が終わらない)
- ・おもちゃに目移りして、食事に集中できない (遊びたがる)
- ・遊び食べをする
- ・お茶を (グチャグチャ) べべして遊んでしまう

者の現場では、どのような解決方法を取っているのか、自由に発言を求めた。

まず、偏食について挙げられた解決策は、①好きなものと嫌いなものを一緒にする(ex. サンドイッチにする)。②嫌いなものを無理に食べさせない。食べるものを食べさせる。

③同じものを出して、食べる子を見せる。毎回声をかける。「おいしいよ」。④食べなくても出しておく。⑤子どもに決めさせる。嫌いなものの量を聞く。イヤと言ったら諦める。

⑥「食べるから見といてなー」というように保育者にアピールする子どもがいる。また、がんばって食べている子を見せて、オーバーに褒める。⑦フォローにまわる役の先生がいる、といったものであった。

③以下は、広げていく方法といえる。

上記の解決方法が使える前提として、周りの行動の模倣が可能であること、関係が成立していること、学習ができる範囲が増えてきていること(図1)、が挙げられる。

その他に、食事場面の支援では、どんな食べ物が食べやすいかや、食べ方の発達レベルを考慮しなければならない。例えば、大人が食べさせていると偏食が少しになったり、大人が食べさせるのを拒否したりするような場合がある。

さらに、食べ方の発達の程度の影響として、今まで食べていたもの(ミルク、母乳)は食べられる、という場合、初期の食べ方のまま変わってないといえる。また、かまないで飲み込むというのは、口の中から移動させるやり方ができていない可能性がある。

食べ物の異物感が高い場合、徐々に慣らす必要がある。食べ物より前に、口の中に異物が入るのを許してもらう必要がある(cf. 昔は2、3か月くらいから、スプーンで果汁を試していた。栄養摂取ではないから、吐いたとしても問題ない。色々な味に慣らすことが目的)。ごく微量ずつ混ぜて、苦手なものの比率を上げていくとよいだろう。

4) 第4回

前回に続き、食事場面の困りごととその支援について考えた。

まず、自分で食べないということが取り上げられた。対象となった児は、食事行動がまったく形成されていないのではなく、スプーンで食べさせると食べるということであった。養育者からすると、甘えているという印象がぬぐいきれないことになる。

しかし、一見単純にみえる「スプーンを握って食べる」という行動も、実はきわめ

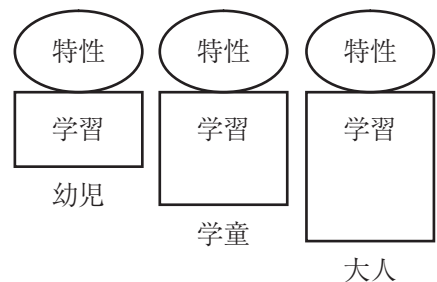


図1 特性と学習のイメージ

て複雑な行動要素からなりたっており、把握動作から検討する必要がある。グー握りという、スプーンの柄を握り込んで食べるという動作が最初に形成されるが、上からグーで握る場合と、手のひらを上に向けて下からグー握りをするという場面では、操作性が大きく異なるのである。下から握り込んで使う動作の方が自由度高いのである。では、スプーンですくう場合を考えてみるとどうであろうか。広口のスープ皿からスープを飲むという場合にあたる。この場合は、下から握り込む動作が適合することになる。手首の関節を考えるとよくわかるが、伸展したままで上から握ると自由度が低くなる。口まではこぼ場合を考えるともっとよくわかる。口の前で手首の関節を動かすのに、スプーンの柄を上から握り込んでいると、可動域がせまくなるのである。肘を曲げると自由度が高くなり、手首関節を曲げることでさらに柔軟な動きが可能となるのである。各関節の組み合わせと、対象を口まで持ってくるという目的行動が、必然的にある動作の形を作ることになるのである。

握り込みは、最後の目的が何であるのかと密接に関係しているのである。通常は、このような行動は自然に形成されるのであるが、引っかかると見えやすい分だけ気になるのである。もし、引っかかる子どもがいたら、と動作を分析してみるとよい。また、環境の側も相手に合わせて整備する必要がある。平たいお皿の液体をスプーンを使ってすくうのは難しいし、深いコップからすくい出すのも難しいのである。適切な食器を使うことによって手が持つ構造による使い方が導かれる。もちろん、昨年話した、姿勢の保持動作も重要となる。スプーンを口の中に入れて、中身が無くなってから出す。この一連の動作が終わるまで姿勢が保持されていないと、スプーンの中のものこぼれ出ることになる。

スプーンの面が子どもの口に対してどのような角度を作り出しているのか、入れ物にスプーンを入れたときに、角度がどのようになっているのかを見てみると動作の適切性が分かる。訓練するには、ちょっと深いお皿が学習には適している。

では、どうすれば食べさせることができるのかである。最初は大人が食べさせるのであるが、その次にスプーンにすくって持たせる、一緒に持つという行動を通じて、持つ場所を教えるのである。この後、握り方をなおすことになる。交互に食べさせあうというのも有効である。スプーンの使用に必要な動作の解析を行い、どの部分を補えばよいのかを知るだけで、子どもの負荷が下がる。重要なのは、この過程が子どものストレスにならないようにすることである。

通常は、このような食べる活動の中でレベルが上がってゆくのだが、不得手な子どもにどのように教えるのが問題となる。操作のスキルを高める必要があるが、食事場面そのものの練習だけではなく、ほぼ同じ形のもので練習したり、ままごと遊びの中で練習することもできる。また、他の遊びの中で、手首を返す運動の練習とし

て、お絵かきや水遊びでひしゃくを使う、砂遊び、というものが有効だろう。また、片手で押さえるという動作も必要である。両手を使う遊び、箱の中に物を詰め込んだり、ビーズを通したりする遊びなども取り入れるとよいだろう。大人と一緒に遊ぶプロセスの中で、援助を入れて食べる楽しみを教えることになる。この中で環境を調整して、食べる楽しみと、道具の操作を学ばせるのである。

環境調整が重要なのは、フォークの使い方を考えてみるとわかる。フォークは刺すという動作であるが、刺して食べるという活動では、刺しやすいものは落ちやすく、落ちにくいものは刺しにくいという矛盾した状態を内包している。これを調整するのが養育者の働きと言える。

もう一つの問題は、文化と動作の問題である。食べるという働きと、道具の使い方が変わる。スプーンからお箸への移行は、食べるという問題とは別の文化的作法の問題になる。文化と動作の相互関連性が生まれるのである。食べるという活動は、形式がなくてもよい。つまり、食べられないものを食べなければよいし、食べるためには咀嚼力があればよいということになる。しかし、それでは動物としての行動ということになる。文化への適応を考えるから難しいのである。文化の中で食べるには、手づかみではなく、道具の使用が必要となり、支える手と操作する手、二本の棒を操作するスキルが必要となるのである。そこに難しさがある。このことを知っておくと、子どもの行動がストレスになるのを少し軽減できるかもしれない。

発達障害の子どもの場合には、さらに注意が必要となる。この子ども達の中には、感覚過敏の子どもも含まれてくる。この場合には、手の感触が問題となる。道具を用いる前に、手づかみ食べということをするが、感覚過敏があると、素手で触るのを嫌がる。このような場合は、道具を持たせた方がよい。また、汚れるので母親がさせない、という子どもも見受けられる。このような子どもは、慣れればできるので、同じ状態でも対応は異なる。

次に、お母さんだと食べるが、他の人だと食べないようなケースを検討した。今回挙げられたケースでは、生育歴、環境の分析も必要である。道具の操作以前の問題や、食事場を養育者が見せていない、といった問題も存在した。

また、立ち歩きながら食べるということについて、単に行儀が悪いと片付けてしまいがちであるが、よく観察すると、別の要因がある場合が多い。例えば、歩き回ると先生が相手してくれるから歩くという、あやまった学習がなされた可能性が考えられる。本人にも素因があって、子どもと混ざると興奮してしまい、集団でいられる状態ではないこともある。大人がいると落ち着いてやりとりできる場合は、職員が必ず付いて、環境を整える必要がある。

これらの問題を考えるときに、環境が悪くて経験が少ないためにできないのか、環

境は良いが本人が受け取れない（特性）のか、を見分けなければならない。これは、正しいやり方を教えたときに見分けやすい。経験が少ない子どもは、すぐに身に付くことが多い。しかし中にはより突飛な行動をする子どもがいる。この子どもは、特性の影響が強いと考えられる。このように、それぞれの子どもの置かれた環境とそれぞれ持っている特性との相互作用を分析する必要があるだろう。

5) 第5回

前は、食事場面の困りごとのうち、道具の使い方に関することと、立ち歩きの問題について考えた。

今回は、お母さんからだと食べるが、それ以外の人からではだめという保育園児について考えていく。一つの可能性として、食べるのが下手だから→不安が高まる→母からしか食べないという連鎖が考えられる。

もう一つの考え方は、食べる動作そのものに問題がある場合である。食べるためには、食物をかみ切って、それをまとめて、喉の奥に送り込んで飲み込むという一連の動作が必要となる。これができない、タイミングが難しいと、食べることがいやになる。

発達障害の子どもの場合には、普通の子がなかなかできないことが逆に簡単にできることがある。普通の子どもが簡単にできることが出来ないこともある。このあたりの判断が難しいと思われる。

次に、姿勢から考える。道具を使うためには、協調運動が必要となる。このためには、姿勢の保持が大切であるが、それができないために、身体が崩れて道具が使えないことになる。個のレベルでなく集団で問題となる行動も姿勢の保持と関係していることもある。座ってられない、立ち歩くということも、実は姿勢と関係している場合もある。また、家では比較的観察される行動かもしれないが、立ち歩いても親が気にしないことがある。年齢よりも食べ方が下手なことも多いので、このような点からも気づかれることが多い。

問題は、このような場合の対処方法である。当該の行動が症状の一部となっている場合には、生活習慣の修正ではなく、他の機能を含めた介入が必要となる。この評価と指導が難しいのである。どれか一つの機能、例えば姿勢保持ができないという問題は、それだけでなく、他の認知発達や食事行動など広範囲の活動に影響することになる。ここで問題にしているのは、食事であるが、それが他の症状の一部であるかどうかの判断は必須であろう。

食べるという行動を定着させるためには、①食べ物がのったスプーンを用意するとそれを見て食べる動作が続く。食べものから目を離さない。②音がでるような食材を使って確認させる。かむ方に意識をむけさせる。「声かけ」する。③周りの刺激をと

る（いらぬものをしまう。カーテンをしめる。座る位置。視覚刺激、聴覚刺激を減らす、など）。④片方の手に何かを持たせる（持っているのが適当と考えられるようなふきんなどを持たせる）、などの方法が考えられる。

立ち歩きの場合は、もう少し別の分析が必要となる。なぜ途中で立ち上がるということの原因を考えてみると、空腹でない、疲れる、終わりが分からない、ルールがはっきりしない、嫌いなものがある、少食、全部食べるまで席を立たないというルールが分からないなどが考えられる。西宮の保育園では「いただきます」を一斉に言うことはあまりなく、個人でスタートすると聞いている。もしこれが影響しているとすると、自分でスタートとエンドを繰り返しているのかもしてない。立ち歩きはエンドで、また戻って食べるのはスタートで、子どもにとっては問題ではない。ごちそうさまを言うと終わりを教えるためには、食器を引き下げてしまうということもよいのかもしれない。

問題行動を、見えている問題だけの解決として捉えないで、その構成要素、それらの相互関係などの視点で分析してみると重要であろう。

6) 第6回

ここまで、食事場面での困りごとについて考えてきた。次に、2～3歳の子どもの生活習慣場面で問題になりやすい、排泄・着替え、睡眠などについて気になる点を、参加者から出してもらい、よくみられる問題行動を整理した（資料2）。

まず、排泄（おしっこ／うんち）場面が挙げられた。現場で見られる、教えれば教えるほど、自分なりの変わったやり方に走ってしまう、という子どもたちを〈変わったやり方グループ〉としておく。これは例えば、おしっこ（うんち）を紙おむつのなかでしかできない、というような子どもたちである。このような子どもたちでも、子どもをよく観察している母は、わりと対処の方法を自分で見つけられることが多いようである。

具体的に、トイレでの簡単なおしっこの仕方がわからない、という括りの中には、①尿意はあるがトイレに行かない子ども、②紙おむつの中でしかできない子ども、③特定の場所でしかしない子ども、ということが含まれている。

まず『おしっこ』と本人に自覚してもらうためにできることは、紙おむつはトイレの中でだけ履いておしっこ（うんち）をしていい、というルールを決めることである。「紙おむつは履いてしていいけれど、トイレのなかだけにしてね。」というように子どもと約束事を決める。紙おむつをしていたとしても、まずトイレへ行く習慣をつけることが大切である。トイレのときは場所を移動するという習慣をつける。「紙おむつ→失敗ゼロ→安心」という方程式を理解してもらう。おしっこ（うんち）の場所は、まずトイレだけに限定してもらうようにする。



生活習慣場面（食事場を除く）の困りごと10

6回 (2012/10/06) で挙げられた発達をもとに再編集。同じ発についての記事と思われるものに複数の内容が入っています。_____下線は、カテゴリ内キーワード。

1. 排泄

- ・失敗するのがイヤでトイレに行かない(尿を溜めて我慢している)
- ・外ではひとりで排泄できるが、家ではできない
- ・外ではパンツを履いているが、家ではオムツの中に排泄する
- ・外ではひとりで排泄ができないが、家ではできる(場所によって排泄できたり、できなかったりする)
- ・3歳までは家族の補助などの条件が揃えば、外で排泄できていたが、ひとりで排泄できなくなってしまう(現在5歳)
- ・トイレで排泄しなければいけないと自覚しているが、トイレで排泄できない。オムツの中で排泄するのイヤ
- ・オムツからパンツに変わった時にお漏らしをしたことかショックで、それ以降オムツを履きたがらない
- ・トイレ自体を嫌がり、部屋の隅でする。

2. 排泄(便器の使い方)

- ・便座に座るのがイヤ(怖い)
- ・便器で排泄できない(オムツには排泄できる)
- ・うまく扱けない
- ・男の子用の立つ便器で、尿のコントロールがうまくできない(ものを持ってやりたがらない)

3. 排泄(排泄の種類)

- ・おしっこはトイレでできるが、うんちはオムツでないとしない(本人がそう決めている)
- ・オムツでしか大便ができない
- ・オムツに排泄しても母に知らせたくないの、オムツが取れない

4. 着替え(こだわり)

- ・同じ服・靴を着続ける(特定の衣服への本人のこだわり)
- ・決まった服しか着ない(脱ぐのを嫌がる)
- ・翌朝もバジマのままの服を着ている(着替えを嫌がるのでそのままの服装でいる)
- ・肌触りに敏感(服のタグ等を嫌がる。タグを全部切らなければならない)
- ・毎日、同じ服が必要(洗濯で着れないと怒る)

5. 着替え(動作)

- ・衣服の着方がわからない(ボタンなどの取り扱いが下手)
- ・自分からは着替えようと行動しない
- ・靴の脱ぎ履きができない(かかと部分を引っ張ることができないため、ひとりで上手に履けない)
- ・季節に合った服が着られない(4歳)

6. 入浴(こだわり)

- ・体を洗う順番にこだわりがある
- ・水に異常に興味があり、水を流したり、流れる水を見つめたり、常に水を触っている。静止してもまたやります。

7. 入浴(動作)

- ・水が苦手(入浴・シャワーが困難。手洗いはOK)
- ・体を洗うのがイヤ
- ・お風呂場へ行くまでに時間がかかる(切り替えができない。お風呂に行ってしまうと大丈夫)

9. 食事(追加場面)

- ・朝食でいつか決まらなかったものとパニックになる。
- ・母乳がやめられない。
- ・大人の言動に興味を示すが、子ども同士の遊びに関心が薄く、遊びの輪のなかに入らうとしない。

10. その他

- ・母の服をめくる
- ・えんぴつの持ち方

8. 睡眠

- ・入眠に時間がかかり、布団に入ってもなかなか寝付けない
- ・睡眠時間が少ない(夜中2-3時就寝⇒翌朝8時起床。昼寝1時間で、1日平均睡眠時間6-7時間で本人は足りているが、母は寝不足)
- ・夜泣きが多くて、夜も寝付きが悪い(朝起きれないため園に遅れてしまう)

トイレトレーニングを始める前に、トイレに行く習慣をつけておく（トイレ立ち寄り習慣）のがよいだろう。例えば、朝起きて、寝る前、出かける前、遊びに立ち上がる時、ご飯に立ち上がる時など、ちょっと立ち寄りという習慣をつける。本人の体の移動や立ち上がるタイミングで立ち寄らせるとよい。注意したいのは、おしっこ（うんち）がでるまで頑張らせないということである。

また、オマルを嫌がる子の特徴として、オマルの感触が嫌である場合、まず服を着たままオマルに座らせる（紙おむつ着用）。周りに子どもがいれば安心することもあるので、その状態でパンツを下す。注意点は、オマルの感触がイヤな子には、短く、頻回に慣らしていくことである。

次に、着替えの場面である。この場面では、①決まったものしか着ない、②パジャマから朝になっても着替えない、③同じ靴を履き続ける、④かかとをひっぱる動作が難しく履けない。くつの脱ぎ履きがむずかしい、⑤ボタンのはめ外しができない、⑥服のタグ（感触）が気になって仕方がない、というように整理された。

睡眠の場面では、①入眠に時間がかかるタイプ、②夜泣きが多くてなかなか寝付けない、③朝起きられないから、園に遅刻する。次の日しんどい、というようなことが起こっている。

保育場面では少ないが、入浴場面については、①水が苦手、②シャワーを嫌がる、③お風呂に連れて行くまで時間がかかる、ということがある。

次回これらの問題に対して対応を考えていくが、基本的な生活習慣の形成を母ひとりの責任にしてはならないということが重要であろう。

7) 第7回

引き続き子どもの生活習慣場面での困りごとについて、問題解決に向けた対処法を考える。まず問題の多い「排泄場面」を押さえない。まず、それぞれの問題を、細かな行動単位に分割し、解決方法を考えていきたい。

それでは「排泄行動」の一連の動作を細かく分けてみよう。排泄行動の手順として、①「おしっこしたい」という本人の感覚やからだのサインがある（からだの動きとして、ごそごそする、前を手で押さえるなどの我慢するそぶりがある）。そして、おしっこ「出た」を本人がわかる。人に知らせられる、ということが、トイレトレーニングの開始のサインになる。

まず「したい」感覚を伸ばす、教えるには、時間を決めて定期的にトイレに連れて行く（2時間くらいの間隔で、生活の節目、活動の切れ目（おやつあと・出かける前など）にトイレに立ち寄る習慣をつける）ことから始めるとよい。家庭のなかは生活の流れがあまりはっきりしていないので定時排泄の感覚が保護者に弱い場合がある。規則正しい生活リズムの流れをつくる必要がある。その子どもの家庭では

どんなリズムで生活をしているか、家庭のなかでトイレトレーニングに関するどのような補助道具を使用しているか、といった、その子どもの置かれている状況を確認することがまず必要となる。

それでは、「したい」感覚とからだのサインがリンクしない子どもの場合は、どのようにすればよいただろうか。まずはその子どもとその子どものからだのサインをよく観察する。子どもが「したい」感覚を言わなくても、からだのサインが出た時にトイレに行くことで「したい」感覚とリンクされやすい。また、大人になると生活の切れ目を考えて計画的にトイレに行くようにすることが多くなる。子どものときから、からだを動かすような移動と移動の合間にトイレに立ち寄ってもらうトレーニングは効果的である。

感覚が麻痺している児（過敏、または鈍感）もいる。この場合は、「したい」という感覚を教えることはあきらめて、時間ベースでトイレに行くようなトレーニング方法（定時排泄の習慣づけ）に切り替える。『これはこれ』という様式で覚えてもらう。他に、目の刺激（トイレ・便座を見る）がトイレの感覚を催すようなトレーニング方法もある。

その他に、安定して定時排泄できずに、半時間おきごとにちろちろとオムツの中で出す児がよく見られる。

昔から夏にトイレトレーニングを始めると良いという説がある。この根拠は、夏は汗をかきやすく水分が分散される。冬は自然とトイレが近くなる。秋は季節の変わり目で子どものからだは季節の変化に対応できなくて漏らしやすいということである。季節によってトイレトレーニングに適した時期というものもある。

近年、紙おむつが進化しており、おしっこをしてもさらさらすぎたり、外に表示ができるようになってきている。このような快適さを求める進化によって、「おしっこした」、「おしっこしたい」という感覚が子どもに生まれにくくなっている可能性がある。おむつを変えてみることで、様子をみてみるとよいただろう。

「したい」という気持ちの次に、②トイレまでの場所を移動する必要がある。この習慣づけは、前出の定時排泄が有効だろう。

トイレまで移動したら、③おしっこできるような状態になる（服を脱ぐ、下着を脱ぐ）。トイレに入ってから衣服を脱ぐようにトレーニングする。

④終わるまで動かずに座っておく必要がある。一瞬しかじっとしてがまんできない子どもがいる。これは、本人のからだの使い方のレベルに問題があるかもしれない。

そして、用が済んだあと、⑤拭く（女の子）という行動が必要である。また、うんちの場合の拭き方は異なる。拭く前にペーパーを切る動作が入る。便器が不安定で片方の手で便器をつかんでいると両手が使えず、片手でペーパーをちぎることが困難に

なる。

そして、⑥パンツをはき、服を着る。⑦流す、という行動にも問題が起こる。それは、流す動作（flash）が簡単なため、かえって流してばかりいるということである。

⑧ドア（鍵）をあけ、スリッパを脱ぎ、⑨手を洗う、手を拭く、というところまでやって完了である。

ところで、男の子と女の子の身体的な差異により、男の子と女の子と教えることが違う点がある。女の子は、しゃがむという動作を教える。男の子は和式と洋式でとる動作が異なる。近年、便座の進化、立ち便座の減少といった、男の子にとっては混乱するようなトイレ事情の変化がある。

そこで、それぞれの便器の特徴を考えてみて、子どもにとってトイレや便座のどんな部分がむずかしいのか考えてみたい。難しい部分・危険な部分をやわらげることができれば、行動が簡単にとれるかもしれない。

立ち便器（男）を例にとって考えてみたい。立ち便器では、立って自分の足にかからないような身体バランスが必要である。保育現場での具体的な指導例としては、まず足を肩幅に広げる。後ろからヒザカクンのように介助して、子どもの膝を少し曲げてバランスを取らせる。この際に気を付けなければならないのは、子ども自身がその姿勢で安定がとれるくらい体が発達しているかどうか見極めることである。本当に立ち便座トレーニングに入れる状態かどうか見極めるポイントとなる。

普通の和式便器（女）では、しゃがむ姿勢を保つ筋力が必要である。おまる（男女）は、「しゃがむ」行為の練習である。

また、最近は洋式便座も増えている。これは、子ども用の便座があるとき、大人用の便座しかないときで異なる。子ども用の便座がなく、大人用の便座を使うと、子どもは足がつかずに宙ぶらりん不安定であり、おしりが落ちる不安・恐怖を感じる。そのため子どもの抵抗が上昇する。物理的対策としては、踏み台を用意したり、おまるのように座るときに前につかまる支えを用意したりするとよいだろう。子供用の小さい便座を設置するという方法もある。

このように、トイレトレーニングでは、具体的にどんな道具を使っているか、対象が男の子か女の子か、子どもの身体機能はどのレベルか、各家庭の生活など、それぞれの子どもの状況を観察する必要がある。

たかが排泄行動だが、子どもの目線で分解すると意外と細かい作業が多く面倒な行動である。このような保育者の理解が支援を考える上で重要である。

8) 第8回

今回は、睡眠場面について取り上げる。2歳の子どもの睡眠で大事なものは、「朝、目覚めて登園できる」ということである。「お昼寝」も生活リズムの中で重要である。

睡眠が重要なのは、成長ホルモンや抗利尿ホルモンの分泌が、夜ぐっすり寝ることで促されるためである。また、夜の眠りでリラックスした状態を作る副交感神経が、腸のぜん動運動を促進するため、便秘とも関係する。つまり、夜間ぐっすり眠れていないということは、体が快適でない状態にあるということである。

では、どのようにして睡眠のリズムをつければよいのだろうか。生まれたばかりのころは、2、3時間おきに授乳、睡眠を繰り返している。1か月を過ぎてくると、少しずつ眠る時間が長くなる。母親もそのころには疲労が限界に達するので、子どものサインに気づかないということも起こる。そのようなことで夜間の睡眠が延びることもある。NICUに入院している子どもを対象にした研究では、生後1か月くらいで夜暗くするとリズムがつき、夜間に寝るようになるということもいわれている。親がリズムを作っていくのに大事な要素は、授乳、明るさ、音であろう。

泣きっぱなしの子どもも、保育所に入ってしばらくすると泣かなくなる。これは、生活のリズムがはっきりし、見通しを持てるようになって慣れてくるためと思われる。保育所の規則正しい生活、場面設定がはっきりしているという性質が良いのだろう。通常は2週間くらいあれば慣れてくるが、半年くらいかかる子どももいる（保育所）。通園の施設だと週3日の通園で、1か月ほど部屋に入れない子どももいる。

余談であるが、泣きっぱなしの子どもには、感覚過敏のある子どももいる。泣き方をよくみると、どんどんヒートアップしていったって、自分の声でさらにパニックになっている。耳障りな大声で泣き、原因がよく分からないことも多い。抱き方などピンポイントで止まることもある。通常は泣き方で子どもの要求が区別できたり、大泣きしていてもだんだんと静まっていったりするのだから、少し違うパターンであることが分かる。

子ども任せにするよりも、親がある程度枠にはめてあげた方が、リズムがしやすいかもしれない。親自身がリズムのある生活ができていないといけない。家庭でリズムをつけたり、場面を分かりやすくしたりするのが難しい場合、外に預けるのも一つの方法である。ただ、そのようにするにしても、毎朝決まったところに出るためには、親が起きられなければ出られない。そのような家庭への援助も考えなければならぬだろう。

次に入浴場面について考える。入浴は保育所にはない場面であるので、指導するのが難しい。夏の水遊びが該当する。水とどう付き合うか、という問題になる。今回は、入浴そのものではなくて、（入浴後に必要な）着替えについて扱う。

着替えの動作は、脱ぐ、着るというものである。まず、ズボン、パンツ、靴下などは、どちらかという脱ぎたがるもので、脱ぐ動作は比較的早くできる。しかし、上着は、手を上げていく姿勢が難しい。袖が長かったり、首がつまっていたりすると難

易度が高い。五本指でつかんでひっぱる、というのはできやすい。きつめの服で練習させる。ボタンやファスナーも外せないといけない。中学生くらいになると、ちょう結びやベルト、スタンドカラー、スカートなどを扱えないといけなくなる。

次に、着る動作であるが、これをしないと何かできない、というものから入ることが多い。靴や帽子は、外へ出られるという合図である。靴をはくのは、踵を引っ張ったり、左右を確認したり、ひもやテープを止めたり、と細かな動作が多い。また、靴をはくときにどのような姿勢でさせるのか、というのも重要である。まず、靴を見なければいけない。段差や椅子があると最初はやりやすい。段差がない地べたではくのは難しい。保育所では徐々に立ってはけるように指導する。

着るのは、パンツやズボンといったものは、座って足を通し、前も後ろもつまんで引っ張り上げなければならない。前後・裏表の確認がいる。これには、何か目印を付けるなど手がかりがあるとよいだろう。

ここまで、生活習慣場面での様々な困りごとを扱ってきた。保育の現場での困りごと、そして解決方法を出していただいた。それぞれの困りごとを解決するには、子どもとる行動、その場の状況をよく観察し、行動を分解して解決策を考えていくことが重要である。

9) 第9回

今年度のまとめと、今後扱って欲しいテーマについて意見を集める予定である。

IV. 研究業績 (2012年)

(1) 書籍

- 1) 河合優年 (2012). 6章 発達心理学 1. 学校教育の基盤としての発達心理学
2. 認知発達. 学校心理士資格認定委員会 (編者), 学校心理学ガイドブック 第3版. (Pp.79-87). 風間書房.
- 2) 河合優年 (2012). II 乳児期3 運動. 高橋恵子・湯川良三・安藤寿康・秋山弘子 (編), 発達科学入門 [2] 胎児期～児童期. (Pp.79-88). 東京大学出版会.
- 3) 河合優年 (2012). ダイナミックスシステムズ・アプローチ. 高橋恵子・湯川良三・安藤寿康・秋山弘子 (編者), 発達科学入門 [1] 理論と方法. (Pp.212-213). 東京大学出版会.
- 4) 河合優年 (2012). 第3章 胎児期・乳児期. 二宮克美・大野木裕明・宮沢秀次 (編者), 生涯発達心理学 第2版. (Pp.31-48) ナカニシヤ出版.

(2) 論文

- 1) 河合優年・難波久美子・佐々木恵・石川道子・玉井日出夫 2012 武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター 2011年度活動報告, 武庫川女子大学教育研究所研究レポート, 42, 107-121.
- 2) 小花和 Wright 尚子・河合優年・山本初実 (2012). 就学前幼児の唾液中 α アミラーゼ活性と意欲との関連, 小児保健研究, 71, 3, 360-365.

(3) 学会発表

- 1) 青樹智美・亀岡恵子・瀬分亮・新屋君香・鈴木八千代・佐藤安子・河合優年・山本初実 (2012) 臨地実習前後における看護学生の心理的対処のタイプが及ぼす影響の検討 (日本語版 MBSS を用いた検討) 第26回三重県母性衛生学会学術集会抄録集, P.7. (三重, 7月)
- 2) 河合優年・難波久美子・荘巖舜哉 (2012) 実験室観察場面における母子行動と後の社会性発達(2)—乳児の観察場面特徴と KIDS との関係—. 日本発達心理学会第23回大会発表論文集, P.241. (名古屋国際会議場, 3月)
- 3) 難波久美子・河合優年 (2012) 絵本場面における母子相互作用の変化と発達指標との関連—“ページをめくる・本を見る” やりとりマイクロ分析結果から— 日本発達心理学会第23回大会発表論文集, P.268. (名古屋国際会議場, 3月)
- 4) 大谷範子・西知美・森繁子・山川紀子・難波久美子・田中滋己・河合優年・山本初実 (2012) すくすくコホート三重の育児相談からみえてきたもの～成長に伴う相談内容の変化と子どもの発達状況との関係～ 第59回日本小児保健協会学術集会講演集 P.145. (岡山, 9月)
- 5) 大谷範子・西知美・森繁子・山川紀子・田中滋己・難波久美子・河合優年・山本初実 (2012) すくすくコホート三重の相談内容～成長に伴う相談内容の変化と子どもの発達状況との関係～ 第27回三重県母性衛生学会学術集会抄録集, P.6. (三重, 11月)
- 6) 佐藤安子・河合優年 (2012) MBSS を用いたストレス認知の型とレジリエンス 日本心理学会第76回大会発表論文集, P.54. (専修大学, 9月)
- 7) 田中滋己・山本初実・河合優年 (2012) 母体のストレスが胎児に与える免疫学的影響 第12回日本赤ちゃん学会発表論文集, P.4. (東京, 6月)
- 8) 田中滋己・山本初実・河合優年 (2012) 母体の受けるストレスと胎児の免疫特性との関連 第27回三重母性衛生学会学術集会抄録, P.5. (三重, 11月)
- 9) 山川紀子・大谷範子・西知美・森繁子・難波久美子・田中滋己・河合優年・山本初実 (2012) すくすくコホート三重の協力者における42か月児の行動特性と母親の

レジリエンス及び自尊心との関係についての検討 第26回三重県母性衛生学会学術集会抄録, P.6. (三重, 7月)

- 10) 山川紀子・森繁子・西知美・大谷範子・難波久美子・田中滋己・山本初実・河合優年 (2012) 5歳児における同画探索 (MFF) テストを用いた「熟慮性-衝動性」の測定と発達の状況との関連についての検討 第59回日本小児保健協会学術集会講演集, P.190. (岡山, 9月)
- 11) 山川紀子・森繁子・西知美・大谷範子・難波久美子・田中滋己・河合優年・山本初実 (2012) 5歳児における「熟慮性-衝動性」の測定と発達の状況との関連についての検討 第27回三重県母性衛生学会学術集会抄録, P.9. (三重, 11月)

(4) その他

- 1) 河合優年 (2012) 「コーホート研究への招待-調査デザインと分析法-」指定討論 第76回日本心理学会ワークショップ (企画者: 横山詔一・前田忠彦・中村 隆、司会者: 前田忠彦、話題提供者: 前田忠彦・中村 隆・横山詔一). 日本心理学会発表論文集, WS34. (専修大学, 9月)

(5) 掲載・発表予定

- 1) 河合優年・中野茂 (編著) (印刷中) 保育の心理学 ミネルヴァ書房.
- 2) 河合優年・難波久美子 (印刷中) マイクロアナリシス (VI部76章1節) 田島信元・岩立志津夫・長崎勤 (編) 新・発達心理学ハンドブック 福村出版.
- 3) 石川道子・難波久美子 (投稿中) 4・9ヶ月児の観察記録画像に基づいた非定型発達の判別視点の探索的検討 -コーディング法による行動解析と医師評価の一致およびその後の発達指標との関連について- 小児の精神と神経.